

芦屋大学論叢 第75号
(令和3年7月27日)抜刷

《実践報告》

芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(2)

—制作側からの視点—

井 村 薫 子
佐 藤 真左美

《実践報告》

芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(2)

－制作側からの視点－

井 村 薫 子
佐 藤 真左美

1. はじめに

本論叢の第73号(令和2年9月)で、芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)として、本公演の概要、各公演演目の選定理由と成果、課題について明らかにした。本稿では、引き続き第4期生・第5期生卒業公演の実践報告を行い、来場者数の推移、今後の課題などを明らかにしていく。

2. 実践報告

2-1. 概要

本コース卒業公演は、毎年12月頃に芦屋市民センター・ルナホールに於いて開催してきた。

卒業公演の出演者は、本コースの学生だけでなく、芦屋学園バレエクラブ生(中高の生徒)や附属幼稚園の課外授業バレエクラス生(園児)、バレエ教師課程ディプロマコース生(社会人)より有志を募った構成となっている。第一期生から第五期生までの各公演における開催日時、卒業生の人数、公演参加総人数は表1の通りである。

表1：過去5年間の公演参加者数

	公演開催日	卒業生人数	公演参加総人数
第1期生卒業公演	2015年12月4日	2名	38名
第2期生卒業公演	2016年12月3日	5名	27名
第3期生卒業公演	2017年12月7日	2名	25名
第4期生卒業公演	2018年12月21日	1名	33名
第5期生卒業公演	2019年12月20日	1名	27名

次項より各公演の選曲理由(全学年で取り組む古典バレエ作品)、作品としての完成度、達成感、そして学年ごとの主題について報告する。

主作品の選曲にあたっては以下の点を重要視した。

- ア. 卒業生全員が満足できる演目である事
- イ. 卒業学年の個性、特色が十分に発揮できる演目である事
- ウ. 送り出す在校生が協力するのではなく主体的に取り組める演目である事
- エ. クラシックバレエ作品から選曲する事(古典音楽作品の学修をシラバスに記載している)

2-2. 各公演演目の選定理由と成果, 課題

2-2-1. 第四期生卒業公演

(1) 第四期生卒業公演の出演者

●大学生

4年生：男子1名，3年生：女子1名，

2年生：女子：2名，男子1名，1年生：女子4名

●中高バレエクラブ生徒：3名

●付属幼稚園バレエクラス生徒：11名

●バレエコース卒業生：2名

●芦屋学園ストリートダンスクラブ生：8名

(2) 選曲について

第四期卒業生の男子学生は、他の学生とは全く違ったキャリアの持ち主であったため、卒業生振付作品に主軸をおいてプログラム全体を構成する方向性を提案した。プログラム構成は、第一部の卒業生作品に主軸をおき、第二部作品には卒業生男子が主役となる演目を探すことになった。

最終的に、第二部作品としてビゼー作曲「カルメン組曲」に決定し、物語「カルメン」としてではなく、一切ストーリー性のない「組曲」として構成することとなった。

(3) 作品作りの留意点

前項でも述べたが、第四期卒業生の男子生徒は、幼少より厳しいバレエ教育を受けてきた。新国立劇場バレエ団研修生を経て、新国立劇場バレエ団に入団し、プロフェッショナルダンサーとして活動をしていた。しかし、彼自身が将来についての展望・視野を広げていくようになり、ダンサーとして生きるためにも経営マネジメントの基盤をしっかりと修得したいと希望し、芦屋大学バレエコースへ入学してきた。ダンサーとしての実力、技量、舞台人マナーを兼ね備えており、新国立劇場で教育を受けてきた彼は、バレエコースの花形的な存在であったことは確かである。在校生全員への振付作品を任せることについては、何の問題もないという確信があった。

この年の卒業公演は、4学年合わせても9名というこれまでで一番の少人数体制であった。さらに、女子学生の技術面での力量が乏しいこともあり、クラシックバレエの花形であるパドドゥ（男女2名で踊る形式：リフトなどの高度な技術が必要である。）の上演は難しいと判断した。第二部作品には卒業生男子が主役となる演目を探す必要があった。

前項にて述べたが、第二部作品としてビゼー作曲「カルメン組曲」、物語「カルメン」とは切り離し、一切ストーリー性のない「組曲」の構成とした。キャストは「男」「女」「運命」。「男」と「運命」は絡みがあるが、物語性はなく「女」は舞台構成の一部的な発想で「躍動感」「舞台フォーメーション」「勢い」を表す事に焦点を置く振付・演出をする事にした。卒業生の男子学生は役柄にはこだわらずに、自分の想いを貫いた大学生活集大成を実感してもらいたい、と考えた。「カルメン組曲」の音楽は妖艶、儚さ、情熱、嫉妬、

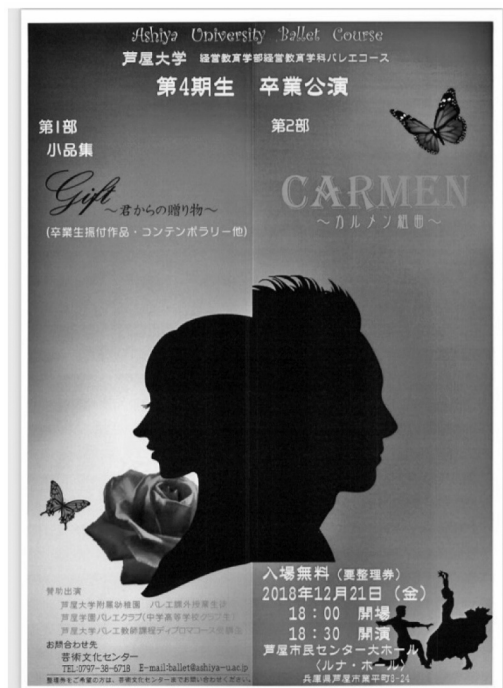


図1：第4期生卒業公演チラシ

希望、これら感情の全てがあると考え、演者自身の感情の爆発を願い振付・演出をした。

卒業生男子に対するイメージと振付作業は、決してスムーズな進行ではなかった。それは第一部に於いて、彼自身の作品を創るという大きな作業があったため、自分が踊る事に集中するのはなかなか容易でなかったからである。そのため、彼自身の創作作品をある程度までしっかり固める事を第一優先としてリハーサルを進行した。

本公演での一番の問題は「人数」であった。メインの卒業生を含めて全員で9名。この少ない人数で、最低でも30分の作品に仕上げなければならない。

舞台上で30分間踊り続けることは不可能、入れ替わり立ち代りを利用したとしても同じ演者が出入りするため、結局ほとんどが踊りっぱなしとなる。舞台上にいて休めるようなフロアパターンを活用する事、それが最大の難問であり、課題は、舞台上の人数をいかに多く見えるように演出構成するか、ということであった。

この難問課題を克服するのはただ1つの方法しか考えられなかった。「スピード感」である。以下の方法でスピード感を取り入れることとした。

ア) 舞台上で繰り広げられる演技と演技の間を、スピード感を持って行う。

イ) 入れ替わり立ち代りを隠すことなく観客の視界に入る程度の照明の下で行い、舞台上の密度感を失わない。

ウ) 空間利用に焦点を持ち高低・伸縮を表現する方法を探し出す

→いくつかの方法を日常生活から引用し、できるだけ身近にある材料を使って「高低・伸縮」を表現できる小道具を発案した。満席感を演出する人型の設置からヒントを得て、椅子を配置する方法を使った。

そして最後に残った課題は、舞台上のダンサーに厚み、存在感をつけることであった。バレエコースの女子生徒は全員が非常に整った体系でまとまっていた。そのため、その体系を活かしながら、ボリューム感を出すために衣装でも以下のような工夫をした。

エ) ロングヘアソバージュのウィッグに派手な髪飾りを貼り付ける。

オ) 細い身体を強調するように、黒のハイネックレオタードを着用。

カ) ローウエストでボリュームのあるチュール素材の段々スカートを着用。

キ) 足元は黒タイツ・黒トウシューズ。(クラシック作品には珍しい演出である。)

ク) メイクは、通常よりオリーブ色系の肌色を使用し、目鼻立ちをはっきり、真紅の口紅を使用した。

そして、照明にあたると彼女達が暗闇の中に浮遊する物体のようにも、人間のようにも見えるように照明の色も工夫した。ステップはできるだけシンプルを心がけた。というのも、彼女達が動く事に躊躇しない事が重要であったからである。空間利用のために両手につけた小道具(ポンポンを細長くしたようなビニール紐の集まり)は幕開きの冒頭に使う事で予想できない作品の展開を見せる事に成功した。

(4) 成果と課題

この公演では、全員が100%以上のエネルギーを放出するくらいの爆発的な出来栄となり苦闘の第四期生作品も無事に成功を収めた。想像以上の好評を得た事も事実であった。卒業生振付作品「Gift」についても、ここで述べておく。

決して器用ではない学生が、物語から自分でオリジナルに書き直し、あらすじ・配役・場面を準備し、振付を創作し、リハーサルを運営した事は学生自身にとって大きな成果であったと言える。本番に至るまでのプロセスと準備作業をこなし、自身も踊り手としての新作に挑み、2つの大業を1つの土俵で達成した事実は、大きな功績であった。在校生は先輩の有志を目の当たりにし、これが彼らにとっての新たな目標となり、脈々と後世に引き継がれることを願うものである。

2-2-2. 第五期生卒業公演

(1) 第5期生卒業公演の出演者

●大学生

4年生：女子1名，3年生：女子3名，男子1名，

2年生：女子2名，1年生：女子2名，男子1名

●中高大バレエクラブ生徒：4名

●付属幼稚園バレエクラス園児：11名

●バレエ教師課程ディプロマコース受講生：2名

(2) 選曲について

第五期生の卒業生は、高校生から始めたバレエに魅了され、さらに深めたいと本学バレエコースに入学した。彼女が入学した時と卒業時では別人のような成長を成し遂げた、努力家の代表選手である。小柄な体系であった彼女にぴったりの役柄であるバレエ「 Coppélia 」の主役スワニルダ。教員一同満場一致で選曲が決まった。

(3) 作品作りの留意点

「Coppélia」は主役スワニルダ、彼女のボーイフレンドのフランツ、そして人形技師によって作られたからくり自動人形のCoppélia、人形技師Coppélius、が展開するコミカルな恋物語のバレエである。第五期生の卒業公演では、スワニルダとフランツの存在を中心に、踊りの名場面を構成してのハイライト形式で上演をする方針とした。バレエコースは前年同様少人数であったが、ディプロマコース受講生、中高大大学バレエクラブ、附属幼稚園の園児たちの参加がすでに根付いていたため、十分にバレエ「Coppélia」の雰囲気と楽しさを表現できる作品に仕上がった。これまでリハーサル時間はクラブ活動の時間を利用していたが、授業カリキュラムに「振付1, 2, 3」を導入し、初年度のころとは比べものにならないほどのリハーサル進行のスムーズさ、指導するに十分な時間が確保できた事で、学生の実力が向上したということも、先に述べておく。

(4) 成果と課題

五期生の女子学生は芦屋大学バレエコースに入学後、本格的なバレエのレッスンを開始した。真面目であり、努力家であった。理解力も非常に早く、身体に染み込ませるために努力する姿は、他の学生にはない姿であった。彼女以外のコース学生全員が幼少からバレエ教育を受けてレッスンを重ねてきている中で、1人初心者であった彼女だったが毎回の練習でもひるむ事なく、勇ましく挑戦し、次の授業までに必ず練習を重



図2：第5期生卒業公演チラシ

ねてきた。上級生のアドバイスや助言、指導の成果も着々と積み重なり、バレエレッスンを開始して1年もたたないうちにトゥシューズで立てるようにまで成長した。

彼女の強みは「やってみる事」「動く事」が大好きだった事だともいえる。先に出来栄を考えずに動いてみる、という作業が彼女は得意であった。年々実力をつけ、上級生としての自覚もついてきた三年生の時は、卒業生振付作品で重要な役どころを見事に踊りきった。クラシックバレエに重要視される容姿を備えているわけでもなく、高度な技術、妙技の持ち主でもない彼女であったが周囲からの信頼は確かであった。順調にリハーサルを重ねていけると思っていたが、思いもよらぬアクシデントが彼女を本番まで悩ませる事となってしまった。怪我である。これまで大きな怪我を経験した事がなかった彼女であったが、就職活動・卒業論文・卒業公演リハーサル、さらには地元のバレエスタジオの発表会と多忙であった。彼女は、施術を受ける必要性・重要性を知らず、休めば完治すると理解していた。

バレエをする上で、一般的に生じる怪我は、足首の捻挫、足の甲の腱鞘炎、三角骨（かかとに突起が生じる症状）、外反母趾痛、などが挙げられる。指導者は怪我の状態を見極め、治療先を紹介し、治療方法・休養期間の目安などを生徒に伝える。捻挫の場合、炎症がある程度治まってきた段階で、治療院にて施術を受け、腱が固まらないように注意しながらリハビリを開始する。それほど時間もかからず正しく施術を続ける事で2週間あればたいい回復の目途がつく。

これまで怪我らしい怪我を経験したことがなかった彼女は、レッスンを休む事で回復すると自己理解し、さらに段階を経てレッスンに戻る経験がなかったため、すぐに元どおりに踊れると考えていたようであった。捻挫から回復しても、いきなりトゥシューズでの練習は難しいため、絶対に無理をさせないように指導をした。卒業公演を目前に控えて気持ちの焦りは勿論であった。

このような状況を経て、彼女は立派に卒業公演の主役級の役を務め、とても素敵なおニルダを演じた。トゥシューズでもしっかり立ち上がって、堂々たる踊りを披露した。

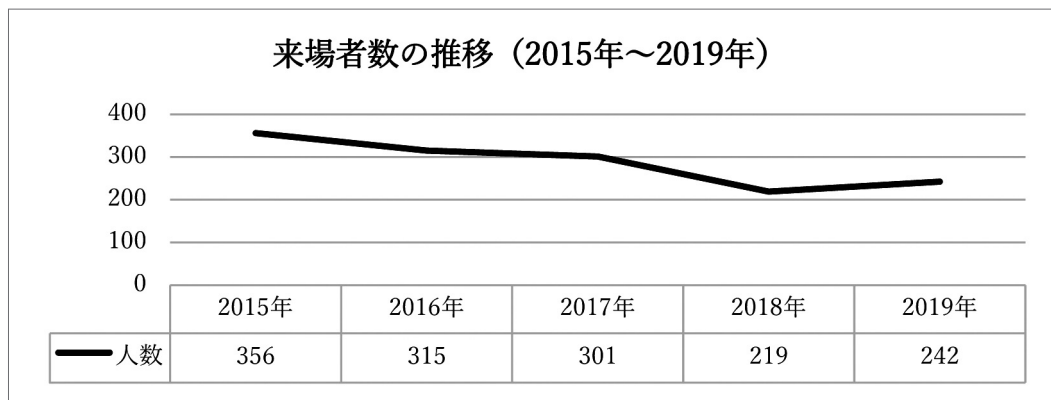
今回、改めて実感したのは、怪我に対する正しい知識を常に教授することの必要性であった。学生は、怪我をしたことを隠したり、無理をしても大丈夫だろう、と考える可能性がある。怪我をした際の適切な処置が必要であるということ、専門家の指示を仰ぎ、無理は決してしないということ、日ごろから指導することの重要性を強く感じた。

3. 来場者数の推移と課題

本項では、これまでの卒業公演の来場者数の推移を報告する。毎年卒業公演を開催している“芦屋市民センター・ルナホール”は最大収容人数が700名となっている。

2015年の初年度は356名の来場者数があったが、その後は減少傾向にある。(表2)この減少傾向にある要因として、表1に表した出演者の総数が関係すると考えられる。他には、天候や開催日時によっても左右されることが考えられる。

表2：来場者数の推移



日本国内におけるクラシックバレエの観客動員については長らく課題とされているが、大多数はバレエ関係者で占められている。しかし、本学バレエコースは他大学や他教室とは違って、私立大学に属しているコースなので、学内におけるバレエ関係者は圧倒的に少ない。まずは学内関係者(教職員・学生)が鑑賞に行きたいと思うような呼びかけを行い、今後バレエを鑑賞したことがない方に多く見に来てもらえるような仕組みづくりを考えていきたい

4. まとめ

この度の実践報告では、主に芦屋大学バレエコース第四期生から第五期生までの報告書となった。第一期から第三期生同様、個性豊かな学生が多かったように感じる。本学バレエコースに集まるバレリーナたちは、出身も経験値も様々である。それぞれの個性がぶつかり合うことで作り出されるエネルギーには、毎回驚かされる。舞台に立つまでの過程も、舞台上で感じる観客との対話も、決して同じことの繰り返しではない。舞台芸術というのは“一瞬”である。この“一瞬”のために、半年以上かけて準備し、試行錯誤しながら迎える。舞台はその瞬間にしか存在できないからこそ、生まれる興奮と感動がある。この瞬間のみに輝き生きる舞台芸術を、今後も学生と共に作り上げ、バレエ界の発展に貢献したいと感じている。

参考文献

井村薫子・佐藤真左美：芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)，芦屋大学論叢第73号，2020。